

Memory of Music

一

遠く、Asのちわめきが、ぬるみはじめた空気をみたくしていた。

G音のスタッカートが、背後からせわしなく追って通り過ぎる。その響きを、一瞬女子高校生達のE♭の笑い声がかき消す。

AllegroのGの行進が止まった。半音の半分ほど低い、E♭の怒鳴り声。被いかぶさるように、かん高いE音の抗議。車が、乾いた土埃を巻き上げ、最初はC♯で、だんだんとCへ、濁った音をたてて走り去る。

堪え難い不協和音は、彼の頭蓋に直接入り込み、必死で聞かまいとする努力を打ち砕く。

朝は嫌いだ。

微睡みから醒める直前、このぞつとするほど無秩序な雑音をあたかも楽音のようにして聞いてしまう。

目が覚めて、疲れた頭を二、三度振り、窓を開けて空気を入れ替えると、漸く意識がそれらを雑音だと認識し始める――

今、カーテンにかけられている彼の左手が動かなくなってから、一日も休む事なく続く朝の儀式だった。

「おはようカミュ」

朝のまぶしい光が、テーブルの上の花を明るく浮かび上がらせていた。朝露を受けてきらめくラベンダーは、今コーヒー入りのマグカップを二つ手に持ってキッチンから出て来た青年が、中庭で育てているものだ。

「丁度今日咲いたんだ。悪くないだろう？」

「ああ……綺麗だな。もつと濃い青かと思っていた」

カミュ・アストール・ルビエは、花瓶に挿された三本

の花穂のうちの一本をとり、顔に近づけた。ウサギの耳のような明るい紫の苞がついていて、香りはよく知っているラベンダーのものよりむしろローズマリーに近い。彼が昔見たラベンダーは深く鮮やかな青紫で、イギリスの少しくすんだ空の色によく似合っていた。その記憶の中の花色にこの家の主の瞳の色を重ねていたので、彼は思ったより少し赤みが強いその花をしばし残念そうに眺めた。

「これ、フレンチラベンダーだからね。このへんじゃ暑くて、君が知ってるイングリッシュラベンダーはあまり育たないよ」

青年は笑い、黙って花を見つめているカミュの顔を覗き込んだ。

「ほら、朝食。俺はもう腹減ったから食ったけど、よかつたらどうぞ。」

視界に飛び込んで来た、深い青の瞳。「瞬フラッシュバックした、一面のラベンダーとその中に佇む女性。」

カミュは微笑し、有り難う、と頷いて食卓に着いた。

ミロ・デル・リオネは、少々変わった音楽ジャーナリストだった。モデルのような長い金髪に彫りの深い整った顔立ち、という派手な外見の割に、浮ついた俄くラシックファンなど歯牙にもかけぬ硬派な文章を書く。批評家の使命とは音楽家と一般のリスナーとの架け橋である、などという甘さは欠片もなく、むしろ音楽家本人の内面や、その結晶である音楽を深く抉り、さらけ出す。当然、その記事に抗議する音楽家も多く、気の合わない音楽家には蛇蝎の如く嫌われる反面、名だたるインタビュール嫌いの大御所から指名を受けて同業者の羨望を買っている。現在はフリーで連載のコラムや特別寄稿などの仕事をして暮らしていた。

カミュがミロを知ったのは、二年前、ミロがイタリヤの有名音楽雑誌のコラムを担当していた時のことだった。当時のカミュは、ショパン・コンクールで一位を取り、少々中性的な容姿が災いして、音楽ジャーナリズムのみならず三流ゴシップ記事の記者にまで追いかかけ回される

毎日だった。心身共に疲弊し切って、もうインタビュ
ーは暫く受け付けない、とマネージャーに断つた翌日、ミ
ロからの取材申込が届いたのだ。

——ミロ・デル・リオーネ氏からの取材申込ですが。

マネージャーは、無表情に断ろうとしたカミュに言い
募つた。

——彼は、貴方が今まで散々悩まされて来たインタ
ビューとは違います。彼本人の希望なら、是非とも受
けるべきです。

その時、手元にあつた *Le Piano Magazine* 誌に、たま
たまミロが寄稿していた。最近人気上昇中のジョージ・
ヒューストンについて書かれた記事で、散々テクニク
や音楽性を褒めた後で、『完璧だ、ただ惜しむらくは、
彼の音楽に常に誰かの影が付きまとうことだ』と結ばれ
ていた。

成程、結構辛辣なことを書く。

記事にひとしきり目を通して、カミュは可笑しくなり、
笑ってインタビュアーを受ける旨をマネージャーに伝え
た。

ヒューストンについては、カミュも同じ印象を持つて
いる。ただ、同じ演奏家であるカミュにしてみれば、駆
け出しの時代に誰かの影響を強く受けてしまうのは仕方
がない、とも感じていたので、そのミロの手痛い扱下ろ
し方に興味を持ったのだ。

シヨパン・コンクールのタイトルや、望んでもいない
セレブ女優からの鼻屑、複数の指揮者とのプライベート
な関係を疑う噂、そんな諸々のバックグラウンドに嫌気
が指して最近演奏も本調子でない自分の演奏をどう斬る
か。心にもないお世辞より、本音を書いてもらいたい。
当時のカミュは、少々自虐的な気分には陥っていた。

数日後、初めて会つたミロ・リオーネは、その第一印
象からカミュを圧倒した。

とにかく若い。まだ二十代後半にさしかかったばかり
のカミュよりも、更に一、二歳若く見える。聞けば、つ
い先日ローマ大学の心理学科のディプロマをとったばか
りだという。

深い青紫の瞳は、記事から読み取れたふてぶてしきは
微塵もなく、澄んで明るかった。

ミロは、終始紳士的にインタビュウを続け、最期にひとつだけ、カミュにとつて耳の痛い質問をした。

『貴方の音楽の向かう先は何処か？』と。

苦し紛れに、『聴衆の皆さんに』と答えた言葉は、記事の中で、『蓋しその言葉はルビエ氏自身を納得させていないようだ』と注釈されていた。

それから、二年。

ミロは更に有名になり、カミュはピアニストをやめた。

今では、カミュはミロの所有するニースの自宅に居候している。ミロは、カミュにとつて、音楽家であつた時代から続く数少ない友人の一人だ。

カタカタ、と小さく鳴るキーボードの音に、カミュははつとして我に返つた。

時折、ミロが打つタイプの音に、どきりとする。楽音などそこにはないのに、それがピアノの打鍵の音に聞こえる瞬間がある。

カミュは頭をゆるく振り、食事を終えた食器を片付け始めた。

左手で物を持つ時は注意を要する——第4指と5指が、慢性の痺れがあつてうまく動かないからだ。

気を付けてはいても、片付ける時に少々大きな音をたててしまうのは防ぎようもなく、その音にミロが反応して顔を上げた。

「カミュ、いいよ、置いておいてくれれば俺があとで片付けるから……」

「いや、自分でやるよ。心配しなくても、この間みたいに君の気に入りの皿を割るようなへまはしない……バイトで鍛えられたからね。仕事の邪魔をしたかな？」

「ああ、あれは仕事じゃない。手紙を書いていたんだ、……知人にね」

ふとミロは微笑み、最後の言葉を彼らしくなく言い淀んだ。ああ、また断られたのかもしれない、とカミュはその微笑を解釈した。カミュはミロに、音楽雑誌出版社の仕事の伝手を頼んでいる。ミロが何か手伝えることはないかというので、ミロの知り合いに仕事を紹介して

もらえるよう、頼んだのだ。

以来、ミロは何人かにコンタクトをとったようだが、カミュはその報告をひとつとして聞いていない。もとシヨパン・コンクールの優勝者であっても、雑誌の編集に役立つわけではない。出版社が渋っても当然だった。

何かせぬでは済まない勢いだったので、好意に甘えたのだが、ミロに余計な負担を負わせてしまったかも知れない。

「ミロ、」

「カミュ、」

無理に時間を裂くことはない、と言おうとして、二人の声がかち合った。ミロは少し居心地の悪そうに、「どうぞ」と笑った。

「……いや、いい。君が先に」

「いや、太したことじゃないんだ。俺、午後はちよつとカフェ・ボルゲーゼで人と合う約束があるんだけど……何か買って来て欲しいものがあるかな、と思つて。それだけだよ。…君は？」

ミロは、ニースに居る間はほとんど外出しない。そも

そも、彼の自宅がニースにある事を知る者など殆どいないのだ。

そのミロが、わざわざ外出する用事があるとしたら……。

カミュは、先に言うつもりだった言葉を飲み込み、小さく苦笑した。

「……いや、いいんだ。…気を付けて。買って来てくれるなら、ムース・オ・シヨコラがいいな」

約束の二時の十分前に、ミロは待ち合わせたカフェに着いた。昼間から有閑マダムで溢れているこのボヘミアン・カフェにわざわざ出向いたのは、別にミロの趣味で

はなくて相手の職場にそこそこ近いからだ。ここから北東に広がる高級住宅街を上って行くと、有名なマルク・シャガール聖書のメッセージ美術館の隣に、ニース音楽院がある。待ち合わせの相手は、ここで管楽器の講師として教鞭を取るアイオリア・ラルフ・クライバーだった。

二時を回ることに二十分、アイオリアが明るい日差しの中を早足でカフェに辿り着いた。汗を拭いながらネクタイを緩めるアイオリアに、ミロは落ち着け、と自分の水を差し出した。

「いや、すまん。ちよつとレッスンが長引いてな……何分待った？」

「まあ三十分ほどかな。でも、仕事の原稿を書いたりしてたから大丈夫だよ。こつちこそ、忙しいのに時間空けてくれて有り難う」

「いや、こつちも丁度良かったんだよ。兄貴はきつと大喜びだ。——ああ、これがその手紙だ」

アイオリアは明るいページジュのジャケットの内側から白い封筒を取り出し、ミロの目の前に置いた。

「現職教授の産休代理だから、一年だけの非常勤なんだ

が……正直、急な話なんで人事も急いでるんだよ。もともと、この秋から産休に入る予定だったのに、子供が早産しそうだってんで緊急入院しちまって、もう生むまで退院出来ないらしい。なにしろ高齢出産だからな。公募となると、また日数がかかるし……大学側としては、適当な人間がみつかるなら募集はしないで内々に決めたい方針だ」

「技術的には難しいのか？」

「ああ！ そんなの、カミュ・ルビエなら全く問題ないさ。音楽院の講師なんて、自分が演奏して目立つことより弟子を世界に送り出してなんぼだからな。彼のコンクールでの入賞歴とその経験は、学生にとつちやオバサン教授のヒステリックな指導よりよほど価値があるだろうよ。弾けなくても指導は出来るだろう？」

ミロは、ふと視線を伏せ、残り少なくなったコーヒーを啜った。ミロがこの話を聞いたのは既に三日前だが、カミュはまだそのことを知らない。きつとカミュは、ミロがまだ雑誌出版社の求人を探していると思っただろう。だが、ミロは最初から、そちらの方面での求人を

探す気はなかつたのだ。

カミュ・アストール・ルビエの音楽は、まだ埋み火のように彼の内部に生きている。

その最後の熱が、ゆつくりと冷えて只の塊になってしまうのを見届けるなど、到底出来ることではなかつた。

「…実は、まだカミュには話していないんだ。」

アイオリアが口元に運びかけたグラスを止め、くつきりと際立った瞳を更に見開いてミロを見た。

「話してないって……だつて、職を探しているのはカミュなんだろう？」

「ああ。だけど、彼が探しているのは音楽雑誌出版社の職なんだよ。はつきり言われた——もうピアノは弾けない、弾けないのに未練を引きずるより、別に自活出来る道を探すつてね」

その時、背の高いウエイトレスが彼等の席に近づいて来た。アイオリアは開きかけた口を閉じ、注文を取りに来たウエイトレスにコーヒを頼んだ。若いウエイトレスは軽くウイソクを残して去つて行つた。

「知り合いか？」

ミロがウエイトレスの後ろ姿に視線を遣ると、アイオリアは苦笑した。

「学生だよ。学院の。まあ、彼女はクラリネットだから、直接指導している訳じゃないがな。この話をするのにこの場所はまずかつたかもしれん……で、さっきの続きだが……」

声を響め、アイオリアは少しミロの方に身を乗り出して続けた。

「自活、つて言つたつて、そんなに簡単じゃないだろう？うちの学生もそうだが、連中、物心ついてから殆ど楽器しか触っていないんだ。雑誌出版つて言つたつて、そんなに簡単なものじゃないつてのは、お前が一番よく知つてるんじゃないのか？ そりゃ、自分が弾けない状態で、楽器に関わり続けるのは口惜しいのかもしれないが……」

「勿論だ。この世界だつて甘くない。音楽しかやつたことのない人間に、そう簡単に適応出来る世界じゃない……いや、音楽をやつていたなら、尚更だ」

ミロは封筒の中身を取り出し、白い便箋に勢い良く走

り書きされた内容を追った。手紙の書き出しは『我が弟へ』で始まっており、奔放な人柄を思わせる文章がその後が続いていた。

親愛なる我が弟へ。

ピアノ科のキャサリン・ホグウッドが入院したのはお前も既に知っているだろう。あのオバハンが教授会から消えたのは大喝采だが（あれを孕ませた旦那は勲章ものだな）、丁度間が悪く他の教授連中も今年はリサイタルが目白押しで、キャサリンの学生を引き取る余裕がない。そんなわけで、急遽非常勤講師が必要になった。

お前の知り合いで、このへんに住んでて通えそうで、学部生の指導が出来そうなヤツはいないか？

どうせオバハン大した事は教えてなかったから、多少の楽典と、実技指導が出来ればオーケーだ。

たしか、お前の友達でナントカコンクールを取った奴

がいるだろう。そいつでもいい。当たってみてくれ。とにかく、長引かせたくないんだ。一人、あのオバハンには勿体ない出来る学生がいる——彼が、長時間放っておかれるのはよくない。

それじゃ、お前の飲み友達にもよろしく。

アイオロス

アイオリアの兄、アイオロス・マックス・クライバーはニース音楽院の指揮科で教鞭をとっている。ウィーンで華やかなデビューを飾り、世界中から注目された指揮者だが、ある年を境にぱったりと表舞台での活躍を止め、ニースに居着いてしまった。とある作曲科の人物を追って来たというのが誠にやかに囁かれる噂だが、本当のところはプライドばかり高いプロ相手に振るより熱意ある学生やアマチュアの指導の方が楽しい、ということであ

るらしい。

「…確かに、カミュにはうつつけの求人だな」

「だろ？ 俺だって、そりゃ飲み友達はいくらでもいるが、流石にショパン・コンクールをとった奴はいないよ。お前が、カミュの職を探してるっていうから、こりゃ渡りに船だと思ってこうして真つ昼間から時間空けたのに……」

「お前の兄さんがこの募集の責任者？」

「いや、違う。だから急ぐんだよ。あのオバハンに自分の弟子でも先に連れて来られたら、折角のポストが埋まっちゃうぞ」

アイオリアが指先で机を叩きながら、溜息をついた。今更、何を躊躇する。そう、苔緑色の双眸が苛ついてミロを睨んだ。

アイオリアは、ミロの経歴について恐らく誰よりもよく知っている人間である。半年前、クラシック音楽界に衝撃をもたらした「事件」の延長で、ミロがローマを離れねばならなくなった時、ニースにミロを匿ったのもアイオリアだった。

「事件」とは、当時最も注目を浴びる若手ピアニストであったカミュ・ルビエの左手の怪我にまつわるものである。

当初、ただカミュの再起不能を惜しむ声で溢れていた音楽界は、ある三流週刊誌のスクープ記事をきっかけに騒然となった。カミュの怪我は、ある音楽ジャーナリストM.T.氏が原因であったというもので、しかもミロがカミュを階段から突き落とす決定的な瞬間の写真つきだった。M.T.が当時急激に知名度を上げていたMilio del Leoneの略であることは一夜にして知れ渡り、ミロはカミュの少々行き過ぎたファンからの過度の嫌がらせで、身を隠さねばならなくなったのだ。

アイオリアがミロを匿った直後に聞いた事件の真相は、少々異なる。突き落としたのは、写真ではミロの影に隠れて見えない第三の人物で、ミロは階段から落ちようとするカミュを助けるために手を差し伸べたのだ。そんなアングルで写真が取れたのは明らかに陰謀であり、ミロもカミュもそのことに気付いていたが、カミュは最終的にその真犯人を匿う行動に出た。すなわち、自分が

勝手に足を滑らせ、ミロはそれを助けようとしたのだ、と弁明したのだった。

アイオリアには、その真犯人を庇う二人の心情が理解出来なかったが、ミロにそれを問うてもただ自分の所為だ、と言うばかりで口を閉ざしてしまう。もともとミロは性格に似合わぬ派手な容姿のお陰で女性につきまとわれる体癖であるし、何か女性が絡んでいるのかも知れない、と勝手に推測しているが、それ以上の確信は何もない。ただ、ミロがこの事件を非常に責任に感じていることは確かであるし、自宅に呼んだカミュに対しても大変気を遣っていることは明白だったから、アイオリアとしてはなんとかしてミロの悩みを軽減してやりたいと思っていた。

思っているが、当の本人がこれほど消極的で、まるで腫れ物にでも触るようにしかカミュと会話出来ないのは、良い方向に進みようもない、と思うのだ。

ミロは苦笑し、手紙を封筒に戻した。アイオリアの苛立ちは尤もで、こうして今もカミュに内緒で音楽関係の求人を探しているのに、今更躊躇する理由はない。

「わかったよ。すぐに帰ってカミュと話をする。…本当に有り難う」

漸く笑顔を見せたミロに、アイオリアは、よつしや、と親指を立ててみせた。

「あら、カミュ、今日は早いわね。まだ時間あるから、ピアノ触ってていいわよ」

「ええ、有り難うございます」

カミュがアルバイト先の音楽喫茶に着いた時、店の女主人のソフィア・モンタンはテーブルに飾る花瓶に花を生けていた。その白い陶器に挿された青い花に目を惹かれて、カミュはソフィアが並べた花瓶に近づいた。

「……これ、フレンチラベンダーですね？」

「あら、よく知ってるのね。あなた、パリに長い間住んでいたんでしょう？ 北でもこれが咲くの？」

「いえ、あまり詳しくはないんです。……今朝、たまたま同居している友人がこれを生けていたものですから」

ふと、カミユの口もとにほのかな笑みが浮かんだ。彼自身が自覚したことはないその微笑みは、見る人をはつとさせる静かな美しさがあつて、ソフィアはしばしその横顔に見蕩れた。彼女自身は夫があり、六ヶ月の子を腹に身ごもつてゐる身であつたが。

「……あらそう。お洒落なお友達ね。ラベンダーは鎮静作用があるのよ……もしかして彼女？」

「いえ、残念ながら、男性ですよ」

カミユは笑い、ソフィアが生けたそれぞれのをテーブルに運び始めた。ラベンダーが振りまく芳香は、確かに不思議に気持ちを落ち着かせてくれる。ソフィアが手を振つて、もう一對を運ぼうとしたカミユの手を止めた。

「だめよ。これは私がやるわ。だから、何か弾いて頂戴」

「いえ、でも仕事で来ているので……」

「開店時間まであと二十分あるわ。お腹の子に聞かせたいのよ。……家には、ピアノがないんでしょう？」

明るく、しかし何処かにカミユを氣遣う色を滲ませた

声がかミユの耳を打った。

ミロの家にはピアノがない。左手の機能を失つて暫くはピアノを見るのも辛かつたが、既に事件から半年が経ち、時折ピアノに触りたい衝動を覚えるようになっていた。

見透かされて、カミユは苦笑した。自分は愚かだ。こんなに音楽から自立しようとしているのに、体がピアノを求めてやまない。

「…わかりました。では、少しだけ。」

入り口のドアから二段ほど高いフロアの壁際に、古いプレイエルのアップライト・ピアノがある。弾く人間は殆どいないが、調律だけは半年に一度必ず行つていて、よくある飾り物のピアノよりはよほど状態が良い。

古くきしみを上げる椅子を引き、浅めに腰掛けた。全身の全ての感覚が、しつくりとその位置に落ち着いた。自宅で、ステージで、一日何時間もピアノに向かい続けた日々がまるで昨日のように思われる。だが指は、かつて現役だった頃より少し筋肉がおちて痩せていた。

バッハのインベンション。たった二声の音の連なりを、

巧みに替指を使って追っていく。

ソフィアが手を止め、溜息をついた。カミュは次第に我を忘れ、音の世界に没頭していった。

事故で、カミュがピアニストとして致命的に左手の機能を失ってから、既に半年が経っていた。最初は、我が身に降り掛かった異変を理解出来なかった。ピアノは、カミュが五歳の時に初めて触れて以来、常に傍らにあって彼を支えて来た柱だ。それが、二度と弾けない、と医師から宣告された時、カミュは周囲の心配をよそにこう答えた。

——大丈夫です。弾けなくとも、耳は聞こえる。音楽がなくなるわけじゃありませんから。

周囲の人間からは、当時、カミュがどこかほつとしているように見えたという。

壊れた指が元通りにならないと知ると、カミュの自らの手に対する扱いは途端に乱雑になった。もう少し動く

ように出来る、と医師から勧められた手術も断り、通院も途中で止めてしまった。

カミュにとつて、ピアノは呼吸に等しい。リハビリして努力しても満足に呼吸できないような状態を、『生きている』と認めたくない。

ならば、別の可能性に賭けよう。音楽のもつ偉大な力を信じよう。

カミュは、病院で自らが放った言葉を本気で実践するつもりでいた。

その、カミュ自身でさえ気付かなかった彼自身のアイデンティティの崩壊に、ミロだけが気付いたのだ。

音楽雑誌出版社に勤めたいとカミュがミロに告げた時、ミロは一瞬表情を凍らせた。カミュにしてみれば、彼自身の怪我はミロに全く関係がないことでもなかった。ミロなりにカミュの決意に衝撃を受けたのだろう、

としか受け取らなかつた。

だが、ミロはカミュのその決意に反対するでもなく、ただ、長期の休養を勧めた。パリを離れ、環境の良い場所、年齢の割に長かつた演奏生活の疲れを癒したらい、と。

その話の延長で、ニースのミロの自宅に招かれた。

始めは、ただ遊びに来たつもりだつた。だが、そこで、カミュはミロの本気を聞かされたのだ。

——俺と、一緒に暮らさないか。

何故その時動けなかつたのか分からない。夕日の落ちかかるバルコニーで、ミロはただ唇に触れるだけのキスをした。それは、性的な感覚からはあまりに掛け離れた、祈りのようなキスで、固く冷えていたカミュの心に不思議に沁み渡つた。

一緒に暮らすようになったが、あれ以来、ミロは友人としての態度を一度も崩さない。それでも、朝に、夕に感じる。何かよくないものから必死にカミュを守ろうとする、ミロの心を。

カラン、と店の扉に下げられたベルが鳴つた。

カミュは指を止め、はつとして時計を仰ぎ見た。開店時刻五分前。慌ててピアノの蓋を締めて振り返ると、ソフィアが既に二人の客を席に案内していた。

「あら、随分ご無沙汰でしたのね？　でもまだ開店まで五分ありますのよ？」

「いや、知つてたけど、通りかかつたらバツハが聞こえるからさ、もう開店してるのかと思つたんだよ。彼は？」

新しいバイト？

「ええ、もうこの子も六ヶ月ですから、お手伝いを頼んでんです。ご注文は？　いつものでよろしいの？」

「うん。彼にも同じものをよろしく」

話しているのは、金茶色の髪の写真が快活な紳士だ。もう一人の顔はカミュの側からは見えないが、見事な銀髪で、もの静かな様子が伺える。最近勤め始めたばかりのカミュには、二人とも知らない顔だつた。

「すみません、つい夢中になつて」

カミュがトレイの準備をしにキッチンへ戻ると、ソフィアはひらりと手を振って笑った。

「いいのよ、彼等は顔なじみだから。でも、これ持つて行つてね」

ふわりとエスプレッソの香りが広がり、カミュの目の前に小さなリモージュ焼きのデミタスカップが二つ並んだ。それを並べてトレイに乗せ、左手の感覚を確かめてから歩き始める。途中、マガジンラックから使い古しのファイルを取り、初めて見る客の前に立った。始めは戸惑いも多かつたが、今ではすっかり慣れた作業だ。

「お待ちせしました。何かリクエストはなさいますか？」

コーヒーカップを二人の前に置き、持つて来たファイルを広げる。この喫茶では、一万枚を超えるクラシック音楽のレコードを保持していて、客は自由にかける曲をリクエスト出来るのだ。今日のように他に客がいなければ、ほとんど曲数に制限はない。

ふと、金茶色の髪の紳士が顔を上げて、悪戯っぽい笑顔を見せた。一瞬、脳裏をよぎった既視感に、カミュはぎくりとした。

この人は……………

「リクエスト、何でもいいのかな？」

「え、ええ、好きなものをどうぞ」

「それじゃ、君のピアノをもう一度聞きたいな」

一瞬、表情が強張つたのをカミュは自覚した。臍げな記憶が訴えた。この人物は、プロの音楽家だ、と。

「…すみません。そういうリクエストにはお答えしかねます。このリストからどうぞ」

カミュの容姿は、初対面の人間にもそれなりの印象を与えるものであつて、幼いころからカミュは人に忘れられた経験があまりない。それは主に、はつとするような赤毛とその代償であるかのように白い肌によるものだが、そうでなくとも目立つ経歴で知らない人間にもいつの間にか名前を覚えられている、というのが常だつた。もしもこの紳士がプロの音楽家なら、おそらく自分の顔も知っているだろう。カミュが全身を固くしていると、それまで黙つてリストを眺めていた銀髪の紳士が口を開いた。

「…それなら、Cの十二番。シヨパンのノクターン集を。」

不思議にすずやかな、落ち着いた声だった。カミュは改めてもう一人の人物を見、その場に硬直した。

髪の色から、初老の紳士だと思ひ込んでいたが、年齢はもう一人とたいして変わらない。瞳の色は、山岳の湖水のような見事な翠玉色だ。

「……何か？」

銀髪の紳士が、カミュを見上げてふわりと笑った。その口元のあでやかさと、冷たいままの翠玉の瞳に、カミュはぞくりとした。

……こんなに美しい人は、見たことがない。

「……いえ、すみません。Cの十二番ですね。すぐに――」

我に返り、慌ててファイルを取り上げる。Cの十二番の項目を確認して、カミュは再びその手の動きを止めた。

シヨパン・ノクターン集 —— カミュ・ルビエ。

呆然と、カミュは二人の紳士を見つめた。二人は既に、エスプレッソに口をつけて、彼等の会話を初めている。

カミュは一礼し、レコードプレイヤーの納められた棚へと向かった。

「……随分と、意地が悪いなあ」

七十インチの大型スピーカーから、優しい音色のノクターンが流れてくるのを聞きながら、アイオロス・マックス・クライバーは正面に座る美貌の作曲家に笑いかけた。サガ・エリアル・ローゼンベルグ。アイオロスと同じくニース音楽院で教鞭をとっている。世間ではドイツ風の呼び名で通っているが、本来の姓はルーセンベリで、スウェーデン系である。

「何が？　そもそも、君があんなバツハの弾き手を知りたいたいというから、開店時間前に無理矢理押し入ったのだから？」

「そうだけどき、何も、あんなに緊張してるのに……顔見れば、誰だか一目瞭然じゃないか」

「生憎、私はルビエの演奏をあまり好かないので、顔も

ろくに知らなかったんだ。だから反応を試したというとき。あの表情からして、まず間違いはなさそうだな」

「いや、それ以前に、あんな赤毛ほかにいないって……

まあ、こっちの素性も感づかれたみたいだが」

ひそひそと、会話は続く。このカフェ・ジュノーはコーヒーの味からレコードの品揃えまで彼等の気に入りの場所であり、オフ・シーズン時には仕事帰りに二人で寄って黙って好きな演奏に耳を傾けるのだが、今日は些か動機が異なるので、他の客が居ないのを良いことに小声で話をしていた。

目当てのピアニストは、良く教育されたもので、用が済んだら目立たぬよう奥に下がってフロアを眺めている。アイオロスは、ちらりとカミュの方に視線をやり、また小声で続けた。

「なんだって、こんなところでバイトなんかしてるのかな？ 彼の経歴なら、もうちよつと割のいい仕事があるそうなのに」

「さあ……。人それぞれだからね。案外、ピアノに飽き飽きしていたのかも知れないよ？」

「どうしてお前はそう皮肉な見方をするかね……このノクターンだって、結構いい演奏してるじゃないか。なにより素直で綺麗だし、暖かみがある」

「そうかな。私には、自分の為に弾いているようにしか聞こえないけれどね。こんなに綺麗な音楽を、自分の為にやっているのかと思うと、ぞつとするよ」

サガはふわりと笑い、『もつとも、そうでない音楽家など、近年ほとんど見ないが』と付け加えてコーヒーに口をつけた。

アイオロスは苦笑して、両手を上げた。この作曲家の辛辣な批評を聞く事が出来る者は、ごく少数の人間に限られる。アイオロスとしては、その中の一人であることに喜ぶ反面、同じ演奏家として痛い思いも共有してしまうので、なかなか複雑なのだ。

「相変わらず、手厳しい……若いうちは仕方がないさ。誰だって、世界を広げる時は自分が起点だ。まあ、多少の例外はあるだろうが」

「君みたいに？」

「怖いなあ。冗談なら怖すぎる」

「まさか。私は冗談は言わない」

アイオロスが、本当だろうか、と本気で恐れを感じ始めた時、壁際で塑像のように立っていたカミュがふと動いた。西に面した窓際へ行き、ブラインドを半分下ろす。その行動が、折しもサガの上に落ちかかって来た夕日を遮るためだと気付いたとき、アイオロスはほう、と口を驚きの形に開けた。

どうということのない行動に見えるが、西日の眩しさを煩わしく思う客に気付かないボーイは多い。相手の状況を思い遣って初めて出来る事だ。

「……成程ね。さっきのバツハはこういうことか」

「カミュ・ルビエが皮剥けた理由かい？」

サガが少し細めていた瞳を開き、問い返す。

「お。お前もそう感じた？」

「少なくとも、このショパンを弾いているルビエとは違つたようだ。なにか…誰かに語りかけているような……」

二人は勿論、カミュがソフィアとそのお腹の子供の為に音楽を奏でていたのだということまでは知らない。だが、何故かサガには子供の頃からそういう部分に敏感な

ところがあつて、それが彼の辛辣な批評を生むものとなつている。

「ルビエのピアノはもとから細やかだが、さっきのバツハにはもつと暖かい視線を感じたよ。気配りつていうのかな…誰かへの思いやりというか。…俺は、やつぱり、今度の非常勤講師には彼が適任だと思う。お前は？」

少年のように目を輝かせているアイオロスを見て、サガは忍び声を立てて笑つた。もともと、己の判断に沿わぬ事など到底出来ないアイオロスである。サガは店の前で足を止めたときからこうなることは予想していたというのに、それでも一応他人の意見を聞こうなどと考えるのが可笑しいのだ。

「適任も何も、彼にまだ話もしていないだろう…先刻の様子からして、口説き落とすのは結構大変そうだが、それでも君はやるんだらう？」

「勿論」

「では、私の意見など気にせず、さつきと行きたまえ。」
「やつぱり不服？」

半分腰を浮かせたアイオロスの手が、サガの長めに伸

ばした髪に触れる。サガはその手を払うこともなく、ただ微笑んで言った。

「——いや。君の口癖通り、人は成長するものだからな。彼の未来を見てみるのも悪くない。」

陸から海へと吹き下ろす風がカミュの傍らを通り過ぎ、後ろにまとめた髪から零れた後れ毛が頬を撫でた。

海の上に広がる一面の星空は、半年が過ぎても、まだ見飽きることはない。カミュはしばしその自然の造形に見入って、それから、ミロの家の扉を開けた。

開いた扉から零れてくる、ノクターン。数ヶ月前までは、聞くのも辛かった。だが、今は。

「お帰り、カミュ。」

カミュの前では、ただの一度もカミュのかつての演奏をかけたことなどなかったミロが、じつと真摯にカミュを見つめている。カミュの視線を受けても、ミロは、笑わない。

「疲れているところ悪いけど、話があるんだ……」

ミロは静かに言い、カミュをバルコニーに誘った。海に面したバルコニーには、先ほどカミュが見た星空が、人工物に一片も切り取られることなく広がっている。

「カミュは、黙ってその後に従った。彼にも、ミロに相談したい事があつた。」

ミロは黒く光る海を見つめたまま、暫く黙っていた。そうして、漸く決意したように、顔を上げた。

「……ごめん、カミュ。約束を破るよ。」

「……約束？」

問い返したカミュに、ミロは少し辛そうに笑った。

「君が望む道を進めるように、全力でサポートする。俺は半年前、そう君に誓った。君が怪我をしたのは、俺の所為だ。無くしたものの大きさなんて、俺なんかには重すぎて計れない……だから、君が望む通りに、といつも

願つて来た。でも……」

潮騒が、途切れた言葉の合間に遠く響く。ミロは欄干の上に置いた両手を握りしめた。

「これ以上、黙つて見ていることは出来ないんだ……！」

毎朝、悪夢に魘される君を。俺が叩きキーボードの音にさえ反応してしまう君を。……分かっている。こんなのは、俺の勝手だ。心理学のディプロマを持つていたつて、君の為に何一つ出来ない自分が齒痒いよ。……でも

……幾度考え直しても、答えは、もう、一つしかない」

ミロはカミュに向き直り、真直ぐにカミュを見た。

「ニース音楽院が、ピアノ科の非常勤講師を探している。

……これが、俺が今まで探した中で一番いい君の就職先だ。あと、パリ、リヨン、ランスの各音楽院でも募集が出ているけれど、パリはそこそこ弾ける人材を求めているので君の手では厳しいだろう。リヨン、ランスは条件はニースと似ていると思う。今詳細を請求しているところだ」

「ミロ、いつの間にそんなに……」

「ごめん。最初から、出版社を紹介するつもりはなかつ

たんだよ。俺は決して、君が音楽しか出来ない人間だとは思っていない。記者はお勧め出来ないが、君なら編集や事務をやらせても、それなりにうまくやつていくだろう……俺がこれまで出会つて来た音楽家の中でも、君はかなり社会への適応が出来ている方だから。……それも」

ミロはその続きを一瞬言い淀み、それでも、決意したように最後まで言い切つた。

「君は音楽から離れたら死ぬ。カミュ・アストール・ルビエという一人の偉大な個性は、鍵盤なしには維持できないんだ。崩壊は進んでいる。君自身さえ気付かぬ間に、今も。」

カミュは、ふと瞳を和らげた。カミュが怪我をしてから、ミロの言葉は常に優しくかつた。柔らかく、暖かく――けれど何処か、精彩を欠いていた。

今、真剣に語るミロの言葉からは、かつてカミュがミロと出会つた頃の鋭さと厳しきを感じる。そして、それ
をカミュは心地よいと思つた。

「カミュ・アストール・ルビエは、医者から死亡宣告を

受けた。……だけどカミュ、君自身が、自分を殺す理由が何処にある？ 無意識の君は、まだ全身で生きたいと願っているのに……！」

風が、ラベンダーの香りを運ぶ。ミロは、少し昂らせた神経を落ち着かせるように口を嚙み、カミュはそのすずやかな香りをしばし楽しんだ。

ミロがこれを植えたのは、カミュが此処に来てからのことだ。鎮静作用があるというハーブを育て、いつの日か、その香りが終わりになき朝の苦痛を和らげる事を願っていたのだろうか。

「……有り難う、ミロ。君は、私よりも、よほど私のことを考えてくれて……私達が最初に出会った時からそうだった。そんな義務など、何処にもないのに」

カミュは穏やかに笑い、欄干に寄りかかっていた体を起こしてミロの方に向き直った。

「ニース音楽院の話は、今日、その指揮科の教授から話を聞いたよ。今日、ジュノーでピアノを弾いて……それを聞いた彼が、是非に、と。」

「指揮科の教授つて……もしかしてアイオロス・クライ

バーか？」

「ああ、そんな名前だった。……一応、明日まで、返事を待ってもらうように頼んだ」

ミロの双瞳が見開かれ、口が驚きの形に開く。

「それじゃ、カミュ……」

「……相談したかったんだ。君に。自分の事なのに、優柔不断と思われるかも知れないが……」

カミュは動かない左手を見た。半年で、すっかり『普通』になつてしまった手。

「……半年も逃げ続けてきたものに向き合うのは、なかなか骨が折れるよ……きつと、大変な作業になる。君にもきつと酷い迷惑をかけるだろう。この家を出れば済む話だけれど……正直、一人で戦い切れる自信がない」

言葉が、喉に詰まる。吐き出すのは辛いけれど、これ以上、虚勢を張り続けても仕方がない。

「引き受けるなら、君の側に居たいんだ。……君が、許してくれるなら」

少し苦しげに呟いたカミュに、ミロは泣き出しそうな笑顔を向けた。そうして、瞳を伏せたままのカミュの体

を力一杯抱き締め、耳元にキスをした。

「君の助けになれる限り、側に居るよ。——どんな時も、必ず。」

たことの証でもあった。

そしてそれは同時に、この先四年に渡り二人を翻弄し続けた、波乱の幕開けに他ならなかつたのである。

翌日、カミュはニース音楽院を訪ね、正式に九月からの非常勤講師の契約を結んだ。アイオリアは喜び、彼の兄に得意げに事の次第を報告したが、逆にその兄からカミュを口説き落とした顛末を長々と聞かされる羽目に陥った。

契約の後、サガは個人的にカミュを呼び、『もしかしら必要になるかもしれないから』と一枚の名刺を手渡した。その紙面には、彼の名前ではなく、既に音楽家の外科手術で名声を上げている彼の双子の弟の名前が記されていた。

カミュが朝の幻聴を聞かなくなつたのは、それから六日目の朝のことである。カミュとミロはその事を喜んだが、それは遂にカミュが己自身に戦いを挑む覚悟を決め